

平成26年8月 広島豪雨災害と

香川勝雄の大蛇退治について

佐古 憲作

はじめに

平成26年(2014)8月20日未明に広島市安佐南区を中心に発生した土砂災害は関連死も含め77人の死亡者が出るなど未曾有の災害となりました。

この災害だけでなく、先人が過去に発生した土石流や津波等の自然災害が発生した場所において「危険である」「注意せよ」との情報や次世代の我々に継承するため地名として残しているという事が話題となり、当安佐南区八木でも昔の地名が「八木蛇落地悪谷」という土石流が発生した地名であったということも広く知られたところです。

全国でも土石流が谷を流れる様を大蛇にみたてた”ジャヌケ”と呼ばれる地名や、山が崩れること自体を示す”アズ・アズキ”(例…小豆島)・円弧すべりを起こしたように崩れる”ツエ””ヅエ”(例…大末)や山の崩落により発生する音に由来した”ナル”(例…鳴川)、土石流を山津波と表現した”ツナミ”(例…安芸太田町津浪)など、土石流にまつわる地名は数多く残っていますが、近年、都

市部においては山地部の開発による宅地化、人口の増加等の原因により住所変更が行われたことで昔の地名が失われている箇所も多く存在し、時代の流れと共に先祖からのメッセージが消えつつあるのが実状です。

安佐南区八木地区では今から約500年前の1532年、当時この地区を治めていた香川光景の家臣で戦国武将の一人、香川右衛門太夫勝雄が大蛇を退治したという伝説があり、これが「八木蛇落地悪谷」と呼ばれるようになった起源とされています。

周辺にはこの伝説を裏付ける光廣神社、貴船神社、大蛇の供養塔、蛇王池等が残っていますが、実際に大蛇退治(土石流が発生した谷)の場所は特定されてはいません。

土砂災害発生から約6年が経過し、安佐南区緑井3丁目から同八木9丁目の阿武山周辺の33溪流では、平成26年度から国による緊急事業の実施により、令和2年6月には40基の砂防堰堤と関連施設の整備が概ね完了し、土砂災害からの安全が確保されました。(図1)

私は、この土砂災害に対応するため、緑井及び八木地区で築造された全ての砂防堰堤の設計に携わり山や谷の地盤状況を調査することが出来ました。

この知見で得た地質情報や古い地名、古墳や大蛇退治を行った後に建立された祠などの地物等の位置関係から香川勝雄が行った大蛇退治を行った溪流、そして大蛇とは何だったのかについて考察してみたいと思います。



写真-1 口田2丁目から阿武山を望む

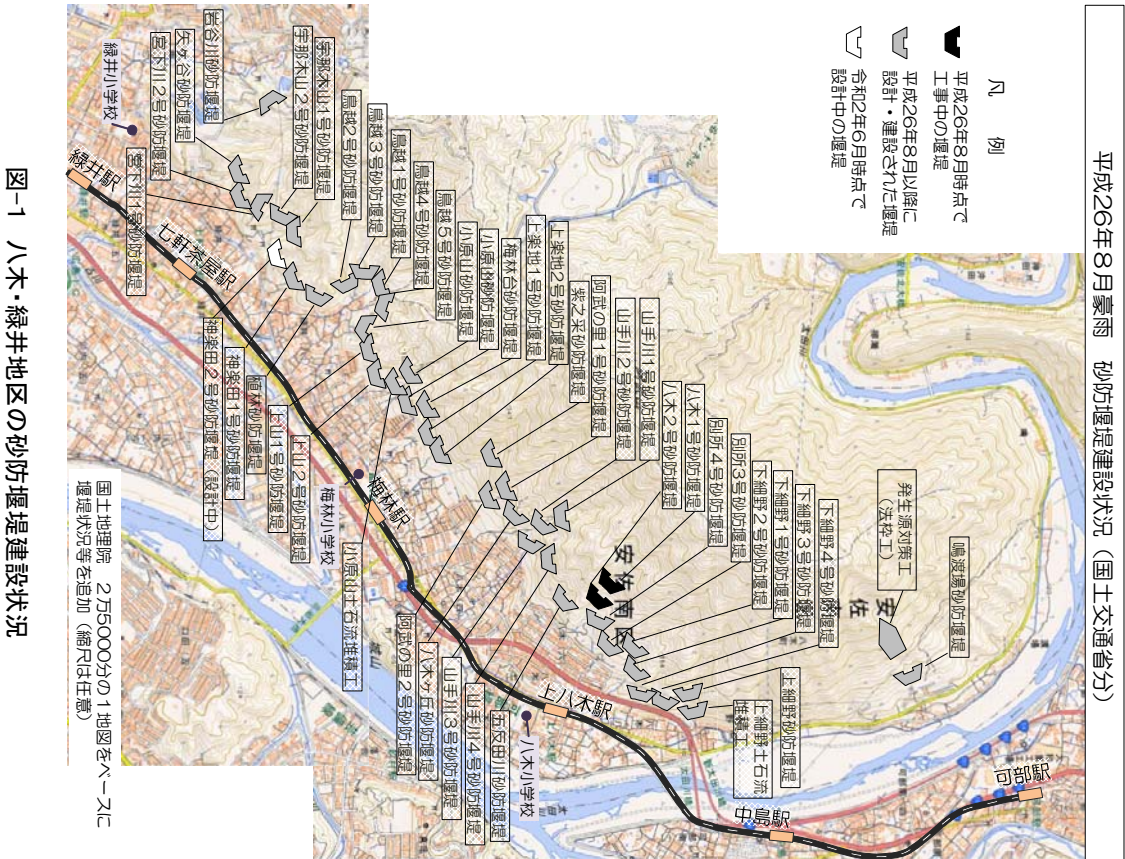




写真-2 八木3丁目 小原山砂防堰堤



写真-3 八木4丁目の砂防堰堤群

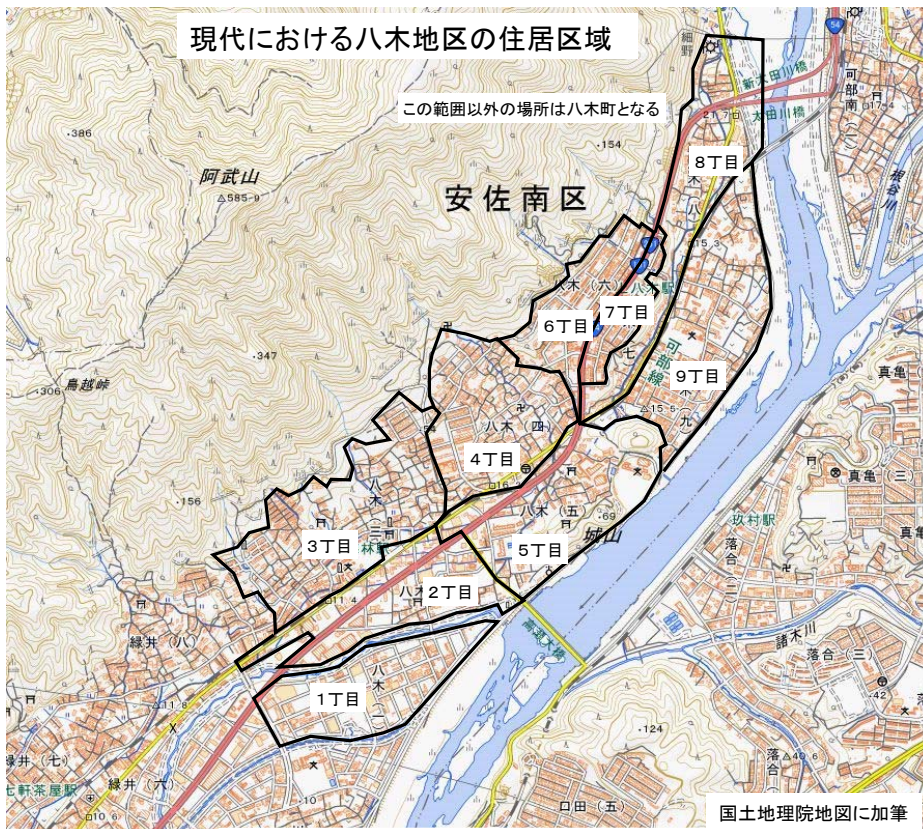


図-2 現代における八木地区の住居区域

地名の変遷をたどってみる

八木地区の名前が歴史上出てくるのは承平5年(935)頃に編纂された「倭名類聚抄」とされます。当時はこの地方一帯を佐伯郡と称し緑井、大町、土茂、養我、幡良、若狭の六郷が示されており、この中の養我が養義となり転じて八木となったとされています。また、厳島文書にある「並行兼私領譲状」では佐東郡八木村とある事からこの文書

旧佐東町字名図(八木地区のみ)
(昭和40年代)



出典: 想い出の佐東町
佐東地区まちづくり協議会 より

図-3 昭和40年代の旧佐東町八木地区の字名図

が書かれた仁平2年(1153)には既に八木という地名が一般的になっていたと思われます。

現在の地名は第1古川と第2古川で囲まれた範囲を八木1丁目、JR可部線から高瀬堰交差点までを八木2丁目、JR可部線から西側国道54号で囲まれた範囲を八木3・4・6丁目、国道54号とJR可部線で囲まれた範囲を7

・8丁目、高瀬堰交差点からJR可部線、太田川に囲まれた範囲を5・9丁目、8丁目より太田川上流と山を八木町というように道路や鉄道線路で分断された区域が住所区域となっています。(図-2)

現在の地番表記になる前の昭和40年代(1965)には、八木地区は60の字地に分かれていました。(図-3と表-1)この時の八木地区の住所表示を見ると確かに蛇落地から変わったとされる上楽地や悪谷から変わったとされる足谷という字地が見られます。

江戸時代中期の宝暦12(1762)年の八木村の字地の一覧もありましたので比較のために載せてみます。(表-1)この字地は昭和40年代の字地と同一箇所にあるかどうかは位置図がなかったので不明ですが、概ね一致する字名も数多くある事が分かります。

この中では上楽地は上楽寺と呼ばれており、昭和40年代に存在する足谷という字名は出てきません。足谷とよばれる字地は戦前はほぼ集落はなく、戦後になって開発が行われ、梅林台団地等が造成されました。江戸時代の字地については人が住んでいた所がほとんどであったので、山は通称で呼ばれていたのかもしれませんが。

先ほど紹介した土石流の発生した地名の一つの「ツエ」について説明しましたが宝暦12年に存在しなかった「大末」という字名が昭和40年代には出てきます。これは同

表-1 八木地区における字地の変遷 昭和40年代・宝暦12年

(名称が違う・宝暦12年にはなかったと推定される)

昭和40年代 (1965)	
古宮	市ノ坪
馬淵	椿原
	浄光院
	足谷
宝暦12年には 川だったと思わ れる字地	岩見田
	上原
	柴之采
東比原	美濃越
西比原下	五反田
西比原上	中村
内川東西	柏木
皆川	大畠
一ツ矢土手外	茅原
向イ代	横割
細野土手外	寺尾
東真蒲	中土居
西真蒲	大采
	大末

宝暦12年 (1762)	
飛渡り	茶屋
縄屋	おどい
たを	丸山
平林	なら原
谷川	下市
堤(堤久)	出張
谷	酒屋
一ツ屋	清水
ミどう	かじや
大下り	けんをうや
山ノ手	松原
野原	国より
石丸	正じん
平野	二ツ森
笹原	寺ノ
中屋	おけや
河戸	たや
	はたはた

(名称・読みが同じもしくは類似している)

昭和40年代 (1965)	宝暦12年 (1762)
辻	辻
関城	関しろ
代	代ノ
別所	別所
下細野	細野
中細野	
上細野	
迫田	さこ田
堂河内	堂垣内
渡り	渡り
下渡り	
上渡り	
十分一	十歩市
鳴	なる
宇津	宇津

昭和40年代 (1965)	宝暦12年 (1762)
小原	小原
下小原	
上小原	
下土居	どい
上土居	
上楽地	上楽寺
市	市
野地	野地
室屋	室屋
田中	田中
柏谷	柏谷
天井林	天頭や
細田山	細田
下細田	
上細田	

出典: 昭和40年代の字地 想いの佐東町 佐東地区まちづくり協議会
宝暦12年の字地 八木の歴史をまなぶ 八木地区連合町内会

年以降に大きな土砂崩れが発生した事により、ある字名を分割して出来たものと推察されます。

また表13にある比原等少なくとも10の字名は、地形の形状から元々太田川の支川の古川(当時は本川)を埋め立てて作られた土地であると思われる、宝暦12年には存在していなかった字地と言えらると思います。

地区内には同年の字地をそのまま名字とされている方も多くおられることもこの地の特徴ではないかと思われすが、いずれにせよ、同年に存在したいくつかの字名はその後の人口の増加等により集落が再編されたという事を物語ります。

伝説の爪痕とそれ以前の遺構・特筆すべきもの

阿武山周辺の八木緑井地区は、その昔、現在ある高瀬堰周辺までが海(入江)であったため、阿武山の南側斜面には多くの弥生時代の遺跡(毘沙門遺跡等)や古墳時代の遺跡(古墳・貝塚等)が存在しています。溪流を歩いていると弥生式土器のかげらが多くの場所で見受けられます。この時代の人たちは水が流れる谷部を避け、山の尾根等を中心に居住地や古墳を築造して生活している為、溪流の中にある土器は集落のあった尾根から雨によって流されたものと推察されます。(写真14・5)

砂防堰堤の建設時には当然、文化財調査も必要となり、

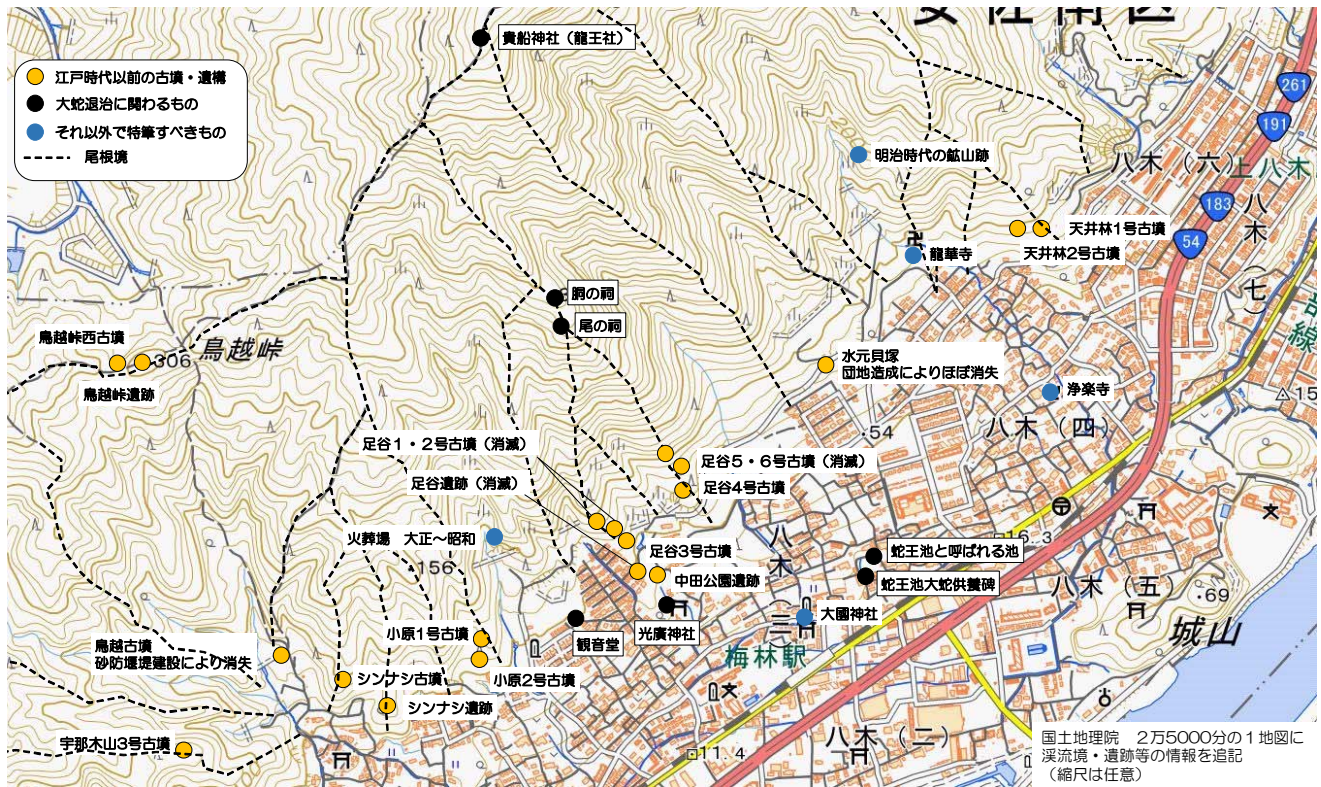


図-4 八木地区の遺構・遺跡など



写真-4 足谷4号古墳



写真-5 阿武山中で見られる弥生式土器のかげら

その所在の確認のため、県、市の担当者と現地を歩いて確認しました。現地を歩いた結果や県で公表されている遺跡位置等を踏まえて古墳等の場所と溪流の尾根、大蛇退治にまつわる遺構等について位置図を作成してみました。(図1-4)

これらを見ると、やはり古墳については山の尾根を中心に作られている事がわかりますが、一方で山の尾根に古墳がない場所も見受けられます。佐東町史をみると、「戦後、住宅団地の開発が著しかった梅林台団地や県営緑丘住宅周辺では文化財調査が行われないまま撤去された古墳も多くあった。取り壊された古墳の石の数から推察されるに5、10基の墳墓があった。」と記録されており、開発等によって図には記載されていない多くの古墳が消滅していると思われる。



写真-6 龍華寺のある溪流での銅山跡
(掻きだした石と入口の石組みが見える)

この他、明治時代に銅の採掘として掘られた鉦口跡(写真-6)や、昭和中期まで使用されていた共同の火葬場等も阿武山山麓に存在します。

香川勝雄が行った大蛇退治に関連する神社、遺構等は次のものがあり、無形ではありますが、歌や名字に入っているもの、書籍も発行されています。

① 光廣神社

大蛇を退治した2本の太刀を近くの八幡に奉納したとあり、この八幡が光廣神社です。太刀は昭和9年に見たという記録が残っていますが、その後、太刀は失われています。

光廣神社は八木城主香川氏の祈願所であったと言わ



写真-7・8 光廣神社

② 貴船神社と胴の祠、尾の祠

香川勝雄が大蛇を退治した後に周辺の住民により建立されています。光廣神社がある山の尾根の阿武山山頂への登山ルートに下から尾の祠、そこから100m程度離れた位置に胴の祠があり、阿武山山頂の貴船神社には大蛇の首が祭られています。

尾の祠、胴の祠、貴船神社とも建立年は不明です。

れています。ご祭神は佐東町史によると八幡三神を主神として相殿に明治初年地区内の小祠火之迦具士神、大歳神、菅原神、猿田彦神、天鈿女神を祀り境内神として稻荷神社がある。とあります。

また、細野神社と光廣神社の間で行われる雨乞い踊りがあるとの事です。

現地の状況から推察すると、尾の祠、胴の祠は近くにある花崗岩の巨石を並べ、一部は平らになるように加工して階段状の祭壇を作り、その上に祠が建てられています。貴船神社は胴の祠から500m程度離れた阿武山の山頂にあります。阿武山の山頂周辺の岩質は泥岩であるにも関わらず、神社に使用されている石は花崗岩が使用されています。また、祭壇上の石も尾の祠、胴の祠に使用されているものよりも小さく、人がなんとか運べる大きさのものが使われています。

このことから貴船神社の石は胴の祠の周辺の山中で採取し、頂上まで運ばれたものと推察されます。



写真-9・10 貴船神社(上)と案内板(下)

③

蛇落地観世音像

県営緑丘住宅と梅林台団地の境にある観音堂に観世



写真-13・14 胴の祠(遠景)(上)と(近景)(下)



写真-11・12 尾の祠(遠景)(上)と(近景)(下)

④

蛇王池供養塔と蛇王池と呼ばれる池

蛇王池の供養塔は昭和27年に建てられましたが、



写真-16 観音堂(八木3丁目)

音像が安置されていました。
この観音堂は蛇落地観世音菩薩堂と言われ、弘化4年(1847)10月に阿武山山頂より降ろされたとされています。地元の方の情報によると蛇落地観世音像は昭和のある時期に盗難に遭い、現在はその姿を見る事は出来ないとの事でした。



写真-15 蛇落地観世音像
(佐東町史より転載)



写真-17 蛇王池供養塔

建立当時の話を知る複数の人から聞いた話では、元々ここら辺りに池はなく、場所も分からなかったもので「ここにしよう」と言うことで建てたとの事でした。
八木小学校創立百周年記念誌「しらうめ」に書かれている「大蛇伝説 蛇王池物語」では「江戸時代中期の宝暦年間(1750〜60頃)までは底なしの沼で稲の種を播くのに板に乗って播いていたと言うことである。」とあり、そもそも、沼に田植えが出来たと言うことなので、蛇王池は一般に想像するようなたぬき池のようなものではなく、ぬかるみの深い湿地ではなかったのかと思われます。そう考えると地域の方が言うような「ため池」のような沼はなかったと言うことも納得出来ます。

この供養塔には以下の文字が記載されています。

表面 南無妙法蓮華經 蛇王池大蛇靈發菩提心妙塔
右面 昭和二十七年第四百二十遠忌相當

發起世話人 同心會

背面 一切衆生悉有沸性 施主 龍華寺檀信徒一同

國前寺檀徒有志

山田 新太郎

辻 治光

藤岡 眞信

梶川 順造

左面 天文元年壬辰二月二十七日八木村阿生山字中

迫に於て當村の勇士香川右衛門太夫勝雄

大蛇を退治す 其の首當地に落ちて隠れたと

言ふ因つて蛇王池と稍す



写真-18 蛇王池とよばれる池

また、その供養塔から直線距離で約50m北西側に離れたところに蛇王池であつたとされる小さな池も残っていますが、前述との兼ね合いが気になります。

⑤ 太刀の名を継ぐ人たち

蛇王池周辺には「刀川（たちかわ）」「刀山（たちやま）」「刀納（たちの）」と大蛇伝説で光廣神社に奉納された太刀にまつわる名字が残っています。

八木城主であつた本家の香川家は、関ヶ原の戦いに敗北した後、毛利氏に同行し萩に移り住んでいます。

また、岩国領小早川家に仕えた香川家も岩国に移っているため、家臣であれば一緒に同行したのではないかと思います。ひよつとしたら古くは光廣神社と関係があり、この地に残った方々かもしれません。その辺のいきさつは調査をしていないのでよく分かりませんでした。

⑥ 蛇王池田植歌と水汲み歌

次に紹介する「黄鳥の笛」の中で明治の初め頃まで田植え歌として歌われていたと紹介されています。

蛇王池田植歌

とん く く く すつてこ く く てこ

へ蛇王池様は どちらからござるやら
アリヤ

黒毛の駒に たづなをゆりかけて

阿生の山へ登って 斬ったら飛んで来た
アリヤ

龍頭のお池に 宝の粃を播きおった
播いて早う去れ この田にや大蛇がおるとき
(返し)

えへい早う去れ
この田にや大蛇がおるとき

とん くく
すつてこくくてこ

とん くくく すつてこくくくてこ

へアゝ躍る龍頭の 血の雨降ってござる
アリヤ

すごいめきに 沈んだところよ
底なし沼地の 今日田植
アリヤ

龍頭のお池に 宝の粃を播きおった
播いて早う去れ この田にや大蛇がおるとき
(返し)

えへい早う去れ
この田にや大蛇がおるとき

とん くく
すつてこくくてこ

下り

へ千秋万歳楽 刀洗(たちあらい)の川できよめた

水汲み歌

へのどがかわくなら

御奇良巧水(ごきろくすい)の清水を

まだもかわくなら

蛇王池清水を七たび

へ頭が痛めば

大蛇の霊へ清水を

まだも痛むなら

蛇王池清水を七たび

⑦ 香川勝雄の生涯を書いた本「黄鳥の笛」

昭和27年(1952)の蛇王池供養祭の時に、地元八木出身の辻治光氏により取り纏められた簡単な蛇王池伝説に関する資料が配られたようです。今ではその資料は失われていますが、その後、昭和33年(1958)に同じく辻治光氏により、再度編纂し直した香川勝雄の生涯を描いた物語の「黄鳥の笛」が発行されています。

この序章には、辻氏が昭和8年(1933)3月に古老から聞いた香川勝雄の伝記物語について興味を引き文献などを調べて物語を書いたと記されています。

物語は3編に分けて書いてあり、第1編 若葉の巻では、香川勝雄の出生から東明寺観音滝修行、元服、出征、伊勢神宮の参拝までが、第2編では大蛇退治、第3編では大蛇退治の後の香川勝雄の周辺で起こった八木城合戦、仁保島・厳島合戦と最後に香川勝雄が戦死した高田城合戦までが描かれています。

このほかに大蛇退治の後に宴を行った時に使用されたという杯や香川勝雄が所有していたとされ、本の表題となっている「黄鳥の笛」などの写真や絵図等が紹介されています。

ただ、詳しく読むと当時の書物にはあまり有名でもない戦国武将の事柄が頻繁に事細かに書かれている訳もなく、例えば、後述する「香川勝雄斬大蛇」事」にも数名の武将の名前は挙げられていますが、それら各武将が何を考えどのように振る舞ったとかは書かれていないので、断片的な情報から筆者が想像を膨らませて書いている部分も多くあるのではないかと思います。

第2編では大蛇退治後に呼ばれるようになったとされる地名の由来や勝雄の眼の治療を行ったとされる御奇良巧霊水の話等、勝雄とはあまり関係のない部分も事細かく書いてあります。

第2編の本文中に筆者が昭和10年(1935)8月15日に発起して「勝雄社」を作り「目の宮」とし

て勧請し奉り、その翌年の昭和11年(1936)5月8日に龍華寺の道場が建立された事も書かれています。(龍華寺の公称は昭和23年(1948) 岩本妙栄上人により創建)

前述した蛇王池田植歌と水汲み歌も第2編に出てきます。また、昭和51年に発行された八木小学校創立百周年記念誌「しらうめ」に書かれている大蛇伝説蛇王池物語や昭和55年3月に発行された「佐東町史」にも香川勝雄の大蛇退治の事が触れています。佐東町史には観音堂にある蛇落地観世音菩薩と合わせて記述されており、この観音堂が昔は東明寺と関係があったと「黄鳥の笛」に記載されていると注釈があり、(毘沙門天堂縁起の中記述があり、東明寺の名前だけが毘沙門天堂に残っている)もし、八木に東明寺があったとすると毘沙門天との関係が説明出来ないとし、面白可笑しく書いた観音信仰の一つであると一括され、大蛇退治の事の詳しくは書かれていません。いずれの書も「黄鳥の笛」が相当影響していると思われる。

原文の陰徳太平記にある「香川勝雄斬大蛇」事」では大蛇退治をした時に眼を患いその後完治した事、勝雄が作州高田合戦で死んだ事が簡単に書かれて終わっています。

「黄鳥の笛」の第2編では原文にはない大蛇退治を

したときに付けた地名の話や大蛇退治後に八木城に帰着した後の宴の話や翌日に盲目になって完治するまで3年間の物語が書かれています。

地名の話では

勝雄が斬った大蛇の首が初めに落ちたところを刀延（たちのぶ）、二度目に飛び入ったところを大蛇の首から流れる血が箒のように噴きつつ飛んだので箒溝（ほうきみぞ）、最後に飛び入ったところは大蛇の血で池となり、その池の中に深く隠れ入ったというので蛇王池（じゃおうじ）と称えるようになった。このあたりを蛇落地と称していたが、後に語路によって上楽地と書き改められた。また大蛇が落ちた近くにあった井戸の水が甘かったので勝雄が「甘露」と名付けたが、その後大蛇が落ちた後には勇気づけ、邪気払い、病魔退散まで言われるようになり「龍水」と称えられるようになった。盲目になった勝雄は阿武山の目薬滝と呼ばれるところの霊水を目に入れた途端、膿がでて治癒し、その後その泉は眼病に効く靈験あらたかな水として知られる「御奇良功水」と呼ばれるようになった。

と書かれています。

蛇王池から直線距離で約700m離れた龍華寺にはこの「御奇良功霊水」がありました。

龍華寺・蛇王池法要・黄鳥の笛、ひよっとしたら何らかの関係があるのかもしれませんが、ここでは深く追求しない事とします。

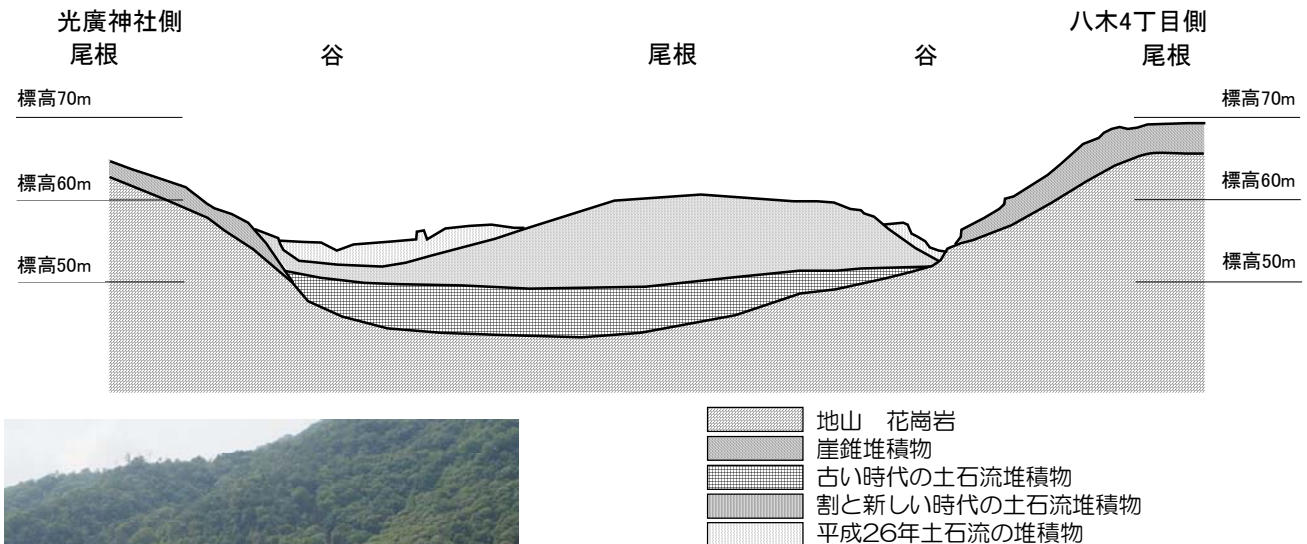
砂防堰堤の設計に携わり分かった事

土砂災害の発生した阿武山の東側斜面では、土石流が発生した溪流はもとより、発生しなかった溪流についても今後の土石流に備えての砂防堰堤の計画が全ての谷部で行われました。砂防堰堤の設計については、堰堤位置で基礎地盤を確認する為、一基の砂防堰堤につき左岸側尾根、右岸側尾根、本堤谷部、垂直壁部の最低4箇所のボーリング調査を行いました。この調査により次のことが分かりました。

①全ての溪流で過去に土石流が発生していた痕跡があった事。

②緑井から光廣神社北側の溪流までは花崗岩を主体とした土質であり、それより北東側の阿武山山頂を含めた土質は泥岩を主体とした土質であった。また、太田川橋周辺では泥岩と花崗岩の層が入り交じって見られ、八木墓園付近では表面が泥岩でその下が花崗岩という地層であった。

③別所団地から太田川橋にかかる溪流では数百万年の太



平成26年度 広島西部山系八木緑井地区砂防堰堤予備設計(その5)業務
パシフィックコンサルタンツ(株)地質調査平面図を基に作成

図-5 光廣神社東側溪流の地質図



写真-19 元々1つの溪流が過去の土石流により
2つに分かれた光廣神社東側の溪流

古の昔、山体崩壊に近い土石流が発生し、その結果、別所団地を含む台地状の土地が形成され、その堆積土が連続作用で再結化(再び石になりつつある)をしている、または洗掘を受けて谷となっていた。

④光廣神社東側の隣接する2つの溪流は元々1つの溪流であり、少なくとも2回の大きな土石流による発生した土砂が「かまぼこ状」(扇状)に堆積し、その結果、溪流が2つに分流させている。こういった状況の溪流は阿武山のある八木・緑井地区の他の溪流では認められなかった。

また、砂防堰堤下流の八木用水より山側の平地部において地質学会によるトレンチ調査が行われ、採取した土砂をC14法で解析した結果、緑井から八木の複数の溪流で香川勝雄の大蛇退治した年代と近い頃に土石流が発生している事が分かりました。

戦国武将香川勝雄の行った大蛇退治とは

「香川勝雄斬大蛇」事は享保2年(1717)に岩国領の家老香川正矩の二男香川景継が父編纂の「陰徳記」を再編纂し出版した「陰徳太平記」第八に「隠岐国合戦之事」「摂州諸所合戦之事」「大内義隆九州渡海付大内小式和睦之事」とともにとして書かれているものです。

本来は米原正義氏校注のものを載せるといいのでしょうか

が、レ点や一段二段読みとなっていて難しいので「八木の歴史をまなぶ（八木学区連合町内会）」により一部書き直された全文を掲載します。

この物語、順を追って読んでいくと大きく7つの事柄に分類出来るようで、内容が分かりやすいように途中部分に標題（しおり）を付けてみました。

本文を読むと当時の様子がしつかり書かれていることが分かります。

香川勝雄斬大蛇二事

陰徳太平記上 巻第八

【①災害の状況】

天文元年の春、藝州佐東郡八木村の内、阿生山の中迫と云ふ處に大蛇頭れて往來を悩乱す。

其形状を聞くに、其大きさ巨象をも呑むべく、其長さ崑崙も繞るべし。入丘八谷の間に蔓延り、松栢背上に生ひたり、其頸蹙恋として、其腸次且たり。褰鼻鈎牙有つて、眼光日月竝懸けたり、舌を掉りては紅煙焰を翻し、身を盤らしては白花を蹙む。草搔き風動じて百毒齎しく起こりて雲霧常に掩ひければ、走獸も地を避け飛禽も空を渡らず。芟を持つ盆荒雄、耒を執る田長など、不幸に行き遭ひては肝を寒し、氣を絶す。かゝれば近邊に往來の道絶えて東作業を妨げ、樵蘇途を失うて村民愁苦する事甚し。

【②八木城主香川家のとった対応】

八木の城主香川左衛門尉光景此由を聞いて、吾が領内と云ひ、殊に館に遠からざる所にかゝる不思議の有りけるを、其儘にて置かん事吾が武功の瑕瑾也とて、一族家中の者共を召し集め、大蛇退治すべき異見を請ひけるに、一門の者共は言ふに及ばず。家子若黨の中にも香川石見守、江戸十郎兵衛、猿渡壹岐守、三宅源四郎、芥川七郎、青木十大夫、錢櫃四郎など云ひて、剛強人に勝れたる者共多かりけれ共、若し仕損じては香川の家の恥辱を致すべしと思ひ、誰進み出でゝ退治せんと云ふ者こそ無かりけれ。

【③香川勝雄参上】

爰に同じく郎等に香川右衛門太夫勝雄と云ふ者あり。十五歳の春に軍場に赴き、敵二人を討取りしより已來、諸所の戦功勝けて計ふべからず。其骨柄、長六尺八分有つて、骨太にして眼逆に裂け、隆準口廣く頤反りて頬髭荒々と生ひ、腕には力贅幾等共なく累々として、毛は猪の怒毛の如く生ひ茂り、色眞黒にして十五人が力を蓄へたれば、さながら寺前の仁王を黒漆に塗出したるに殊ならず。常に伝ひけるは、人が人を切ることは珍しからず、鬼神か天狗などを切りたらんこそ異常の巧共云ひつべけれ。哀五百年も千年も已前に生まれたらましかば、源頼光の御内に四天王と聞えたる人々に列して、大江山の酒吞童子を斬り、羅生門の鬼をも綱殿にはせさせざらまし物を、今澆季の世と成つ

てかゝる奇怪の事も無ければ末代に知らるゝ大功をもなさで、空しく朽果てなんことこそ口惜しけれ。如何なる不思議も出来れよかし、人に先をばせさせじものと、腕おし摩りて居たりける。此時しも伊勢神宮にして有りけるが歸さの路次に斯と聞きて、あはれ希有の出来たるこそ願ふ虜の幸ひなれと、思ふに進む足竝早く、舍りにも歸らず。路上より直に光景が館に馳せ着き、何の思慮する迄もなく、此事さして御僉議に及ぶ事にも候はじ、かう申す勝雄に仰付けられ候へ、易々と退治仕り候ひなんず。渠いかに天地に屈伸して働く共、人は萬物の靈なれば争か人力に勝り候ふべき。異朝には漢高、梁武、我が朝に素戔鳴尊は、正しく當國可愛川上にして大蛇を斬り給ひし先例も候。千萬歳は隔つ共、勇烈の揆は一等にて候はん。是非に於て某馳せ向ひて、しや身首二つに作してくれ候ふべし。さりながら大事の仕物にて候、義元の御刀借し給はり候と云ひければ光景大きに感稱して、家に傳はる所の義元の太刀三尺一寸有りけるを勝雄にこそは興へけれ、勝雄は望み足りぬと悦び、太刀推戴にて腰に指し、満座へ一禮して起ちけるが、又立歸りて申すやう。さるにても今度さしも大功の面々の其の中に、某一人望みて馳向かひ候ふ上に、毒蛇退治仕得ん事、一定手に取りて覺え候。若し千萬に一つも仕損ずる者ならば、大蛇と組打ち仕り候はん。再び歸りて人々に面を向く事候はじと、荒言吐散して出でたる有様は、あつぱれ大剛の者やと感あへり。

【④香川勝雄いざ出陣】

さて勝雄は吾が家に歸りて用意の様花やか也。時しも春の事なれば、小櫻緘の鎧透間なく著なし、五枚冑の緒を締め、義元の太刀に二尺三寸の左文字の打刀指添へ、多くて悪しかりなんとて、唯一人黒なる馬に打乗りて、二月下旬の曉月の光を冑の星に映じさせ、猶迂回る山風梢を鳴し、小篠の霜の白妙に野寺の鐘仄なる比ほひ、阿生山をさして上りけり。

されば大蛇は、元來龍に化する異霊の者なれば斯とや曉りけん、山中に入る比しもいと臆の春の月、俄かに空掻き曇りて山嵐烈しく吹き落としたるに、深谷隠れの櫻花、木の葉と共にはらはらと散亂して、時ならぬ村雨一頻降り來り、巖崩れ岸裂け、山鳴り谷應へて満山暗々然として、物のあやめも見え分かず、いと冷じかりければ、乗りたる馬も進みかね、身振して立ちたりけり。

【⑤大蛇の正体】

勝雄少しも動ぜず、察大蛇の出で來なめりと思ひ、馬を傍に乗り放ち、歩立に成りて岩を傳ひ葛を攀ちてぞ上がりける。東方既に白なるとするに、雲間より山の頂上を杳に高く見上ぐれば、高さ十丈許なる岸陰に、樞の大木の一の枝に大蛇頭を持たせ眠れる體に咽鳴居たりけるが、息の甚だ悪かりければ、五七間邊の艸木は嵐に靡くが如く也。

【⑥香川勝雄大蛇を斬った結果】

勝雄是を見て、いかに鱗蟲なればとて、一言もかけず斬らんは、寝首を搔くに等しと思ひ、程近く立寄りて、如何に毒蛇も慥にきけ、凡そ物其止る所あり。其所を得れば身安く、其所を失へば危し、然るに今汝深山重淵にも藏れず、人里近く出て來りて萬民の往來を妨ぐる事、是れ殘害を受くべき自業自果の致す所也。

今斯云ふ者は香川光景が家臣香川右衛門太夫平勝雄、年積りて十八歳、汝が狼藉を鎮めん為に來たれり。汝其所を去つて本の深淵に立歸り、再び來りて災を成すまじくば早く去るべし。さらずば、此勝雄が向ふ上は唯一太刀に切り殺してんと、高聲に呼ばはれけり。大蛇是を聞いて、眠れる眼を闊と開き、紅の舌を閃々として火焰をふつと吐き出し、左右の角を掉立てつゝ岩を碎き樹を折りて、唯一口にと飛んでかゝれば、勝雄太刀を抜きかざし、飛び違へて丁をきる。其首中に飛び去つて雲路杳に登りけるが、良有つて黒雲一村火焰を包みて降ると見えし。彼の首勝雄が上に眞逆に落ちかゝるを抜けたる太刀なれば、背けさまに二太刀切る。斬られてや疼みけん、其首七八町飛び去つて田上に落ちけるが上下轉動夥し、尚勢ひ休まずして又一町許り飛び去つて、地を穿ち岩を覆し、躍騰り跳廻り、流るゝ血川をなし、其地終に淵と成り。首は淵中に淵潜れて、月日へて咽鳴音、山彦答へて冷じく、聞く人心を傷しめ肝を

寒す。

【⑦香川勝雄の英雄伝、そして・・・】

彼の首始めに落ちたる處をば太刀のぶと云ふ。後に飛び入りたる處をば蛇王子と號して、今に至つて淵をなす。勝雄が太刀を洗ひし池をば太刀のぶ川とぞ名付けゝる。

古今蛇を斬る類少なからずと雖も、勝雄が如く勇なるはなしとて、都鄙の巨言茗話と成る。彼の太刀をば素盞鳴尊の龜正に齎しとて、所の八幡に奉納せり。勝雄も大蛇の毒氣にや中てられけん。両目を久しく煩ひしが、醫療の功を歴て平癒し、永禄十二年、作州高田合戦に戦死す。

これで香川勝雄の大蛇退治は終わります。

物語を簡略化してみる

原文では分かり難いので少し私の解釈を含めて分かりやすくしてみます。

① 災害の状況

題名が「香川勝雄斬大蛇」事」の話なのでこの年に香川勝雄が大蛇を斬った事になります。物語では既に大蛇がいたとされているので、それ以前に大蛇が出てくる事件が発生していなければなりません。

天文元年（1532）の前の年に八木村のなかで、阿武山の近くにある中迫と呼ばれる所で大規模な土砂災害が発

生し、その結果、大蛇が現れたと言う事で村の中の行き来が出来ない状況になっていた。

その大蛇は巨大なゾウを飲み込むような大きさで、中国の伝説に出てくるような崑崙山のような山だった。

大蛇の背中には角があり、松や柏等の木が生えていた。

大蛇の頭は細く眼の部分や腹の方は太陽に反射してキラキラ光っていた。舌を出しては赤い煙と炎を出し、動く度にギシギシと草を掻くような風の音がした。また、風で揺れるときは毒を出して、大蛇の周りには常に雲や霧がかかっていたので、動物もその場所を避け、鳥もその付近を飛んでいなかった。

これらを整理すると大蛇の主な特徴は、次のようになります。

- ・ 中国にある山の尾根のようにとっても大きい。
- ・ 背中に角があり木が生えて爪もある。
- ・ 頭は細い。
- ・ 眼や腹が太陽に反射してキラキラ光る。
- ・ 風により自らが揺れる。
- ・ 舌から赤い煙のような炎が出る。
- ・ 風が吹くと周囲に毒をまき散らす。
- ・ 常に霧や雲に隠れるような高いところにいる。

なんとも不思議な生き物ですが、大蛇とはなんだったかについては後に取りまとめます。

大蛇出現のきっかけとなった土砂災害による被害は「入丘八谷の間に蔓延」とあるため、一つの谷で発生したのではなく、複数の谷で発生していたと思われます。

このため、山で木を切って生活していた者や稲作をしていた者も土石流の発生により、山の斜面が削れてなくなり、また田畑が埋まる被害が発生したため、生活が出来なくなるほど困難となったのではないのでしょうか。

また、風により自らが揺れる（不安定な状況）ことで住民は大蛇が何時落ちてくるとも判らない状況であったため、大蛇の下を通る道路が寸断され行き来が出来なかったのではないかと推察されます。

②八木城主香川家のとった対応

八木城主の香川左衛門尉光景は城の近くで大蛇が出たという話を聞きます。そして、この非常に不安定な大蛇の首をどう処理するのかについて家臣を集めて話し合いが行われましたが、家臣達は戦ではないことと、もし大蛇を落としてしまつて住民に被害が発生したら（失敗したら）将来にわたりその事柄が受け継がれてしまい「恥さらし」若しくは責任をとって「お家断絶」になると考え、だれも自ら退治をすることを望まなかつたのです。

③香川勝雄参上

その話を香川右衛門太夫勝雄が聞きつけます。18歳と

いう若さもあつたのでしよう。この部分の物語の大半は香川勝雄の見た目や容姿、武勇伝や伊勢神宮に参拝してきた等が書かれています。今回は省略します。また、素戔鳴尊が退治した八岐大蛇伝説と似ている事や、大蛇退治に行くと聞いた香川光景から家に伝わる義元の太刀を借り受けた事が書かれています。

④香川勝雄の出陣

勝雄は八木城から帰ると華やかな衣装に着替えます。たまたま季節が春であつたためか小櫻緋の鎧をまとい、冑をかぶって借り受けた義元の太刀ともう一つ別の太刀を準備し2本を脇に差します。

出発は昼ではなく、「暁の光を冑に反射させ」とあるので夜になって、一人で黒い馬に乗り、春とはいえまだ霜が降りるような寒空の中、寺の鐘をかすかに聞きながら阿武山を目指しました。

勝雄も大蛇自体を見た事はなかったらしく、大蛇は龍が化けたものと思つて山に入りました。

山に入ったときは晴れて星空が見えていましたが、春先によくある急に大気が不安定な状況となり、一気に雲つて季節外れの雪起こしが発生したと思われまふ。この結果、山桜が散るほど風は急に強くなって冷たい雨が降り、岩の裂けるような轟音の雷が鳴り響いたと思われまふ。そして悪天候のため今まで見えていた周りの景色や道が暗くて見

えなくなり、雨に濡れたことにより寒くなって乗っていた馬も震えて前に進まなくなつてしまいました。

阿武山の登山口は細野神社から鳥越峠までの間には複数のルートがありますが、勝雄は光廣神社から阿武山に登るルートを選んでいると思われまふ。その理由は、文中に「馬を降りて歩いて岩を上がり、葛をつたって岩山を登った」と書いてあることによりまふ。阿武山の谷部には岩や滝になつた崖がある溪流は複数存在しますが、山頂を目指すためには一般的には尾根沿いを歩きます。この尾根沿いに巨石がある場所はこのルートしか存在しません。尾の祠、胴の祠もこのルート上にあり、大蛇が一番近くにいる最短のルートを選んだと言うことになります。ちなみにこのルートは光廣神社から入るとしばらくはなだらかな山道ですが、約15分も歩くと急に岩が出て馬では登れなくなりました。勝雄の馬は寒くて前に進めなくなつたのではなく、山が急になつて岩も出てきて登れなくなり、置いて行かざるを得なかつたと思われまふ。

⑤大蛇の正体

勝雄は急な天候の変化から大蛇が出てくる前触れだと思ひ、馬を置いて岩山をカズラをつたいながら登りました。そんな事をしていたら悪天候もおさまり、東の空が日の出前で白くなつてきて周囲が見えるようになったので山の頂上を下から見てみたら、高さ十丈(約30m)ほどの大き

な岩の岩陰から生える榎の木の間に大蛇の大頭（巨石）が顔を出している（引つかかっている）のが見えました。嵐で風が強かったのもあり、木が揺れる度にギシギシをうめき声の様な音がして、強風によりその揺れが（榎の木自体も）激しく周囲の草木も嵐に合わせたように大きく揺れ、大蛇の一部のように見えたのでした。

⑥香川勝雄大蛇を斬った結果

勝雄はこの状況をみて、如何に大蛇の化け物だろうが自分の名乗りを挙げずに切り倒してしまうのは、不意打ちによる寝首を切るのと同じで武士道に反すると思い、大蛇のいる（巨石が挟まっている）榎の木の近くに立って、いかにも大蛇に話すように、「民衆を困らせた大蛇の悪態を罵り、この悪態において成敗されるのは自業自得である。今香川勝雄が汝のロウゼキを鎮めるためにやって来た。今すぐここから立ち去り再び来て災いをなすのではない。それが出来ないのならこの勝雄が一刀成敗してくれようぞ」と声高らかに叫びました。

大蛇はこれを聞いて眼を”かつ”と見開き紅の舌を悶々として火焰を”フツ”と吹き出した。時間は日の出の頃のように白くなってきた明け方です。たまたま朝陽が大蛇の巨石を照らして光ったのがそのように見えたのか、また、先に大蛇は紅の舌から火焰を放つと書かれているためそれに合わせるように物語として盛り上げるために書かれたのではな

いかと思います。実際には火焰は直前に降った雨で赤茶けた泥水が流れていたのを表現したのではないのでしょうか？ちょうどそのタイミングで巨石を支えていた木の1本が折れてしまったので安定を失った巨石が勝雄のいる方に落ちてきた。勝雄は太刀を抜いてその巨石をなんとか避けて大蛇（巨石）の下に折れた木を切り飛ばします。その首は木を切った反動で山の上の方に飛ばされたが、すぐに落ち始め、山の下にある集落を襲うような動きに見えたため、勝雄はこれはやばいと振り向きざまにもう二太刀斬って家のある方向から転換させました。

この結果、大蛇の首（巨石）は約800mくらいゴロゴロと転がりながら田んぼに落ちたが、勢いがあったため更にそこからまた100mくらいゴロゴロと転がり地面に穴を空けたり、通ったところが溝川になったり、最後はぬかるんだ場所で止まりましたが、石の重さで地中深く沈んでしまいました。

実際、胴の祠がある辺りから光廣神社までは直線距離にして約800mくらいあるので、蛇王池供養塔がある辺りまで落ちてきたのであれば距離的にはあながち間違いではないと思われます。

巨石が落ちた時、地響きと共にものすごい大きな音がしたが勝雄が大蛇を斬った時間が早朝だったため現場を目撃した人はおらず、何日か経ってその轟音が凄まじく、遠くの村まで聞こえていた事が住民にわかると、皆、びっくり

した様子でありました。

⑦香川勝雄の英雄伝、そして・・・

その後、村人は大蛇の首（巨石）が最初に落ちた所を「太刀のぶ」最後に首が沈んだ所を「蛇王子」と呼ぶようになり、蛇王子は沼（ぬかるんだ土地）となりました。そして勝雄が大蛇を退治した記念として太刀を洗った池を「太刀のぶ川」と名付けることとしました。

古今東西、大蛇を斬った者はいないと勝雄は一役英雄扱いとなり、都市でも英雄伝として話されるようになりました。

勝雄は大蛇を斬った太刀を素戔鳴尊と同じ働きをしたとして光廣神社に奉納しました。

勝雄も大蛇退治の時に大蛇の毒気（思うにウルシ等の汁が眼に入ったか）にあたり、割と長い時間両眼を患ったようですが、治療を行い完治します。「黄鳥の笛」では勝雄が大蛇退治の翌日に全盲となります。もし目に毒が直接入っていればその場で目が見えなくなると思われ、また大蛇退治の直後に全盲になっていたとすれば、山から下りる事は勝雄が一人で山に入っているのでは出来ないと思われる。なので、勝雄は全盲になるような事はなかったのではないかと推察されます。

そして目が完治した後は武将として再び戦等に参戦し、大蛇を退治して37年後の永禄12年（1569）の作州

高田合戦で54歳で戦死しました。

大蛇の正体とは

前段に出てくる村民を困らせた大蛇の特徴と後半に出てくる香川勝雄が見た大蛇の特徴、これらの特徴を土砂災害に当てはめてみると大蛇の正体はこのようなになります。

この山は広島花崗岩による風化した真砂土に覆われているが、大規模な土石流により光廣神社東側の斜面が崩壊し、尾根にはコアストーンと呼ばれる巨石や岩が現れた。

巨石や岩は花崗岩であり、新たに土の中から現れたため苔とかが付いておらず、花崗岩に含まれる石英等の鉱物が太陽に反射しキラキラ輝いて、集落から見ると蛇の眼や鱗のように見えた。

大蛇の首と呼ばれる巨石は、山の下から見上げると約30mもの連なった巨石のかたまりの中から生える榎の木の間につっかかって、今にも落ちそうになっている状況であった。このため、風が吹くと木の揺れに合わせて巨石もギシギシと音を立てて揺れた。

舌から出る赤い炎については、雨が降ると真砂土の赤茶けた水が流れてきたのか、乾燥した真砂土が風で飛ばされて土埃となったものを表現したものだと思います。

また、「周囲に毒をまき散らす」のは木に引っかかった巨石が風で揺れてウルシ等のかぶれたりする木とこすれ

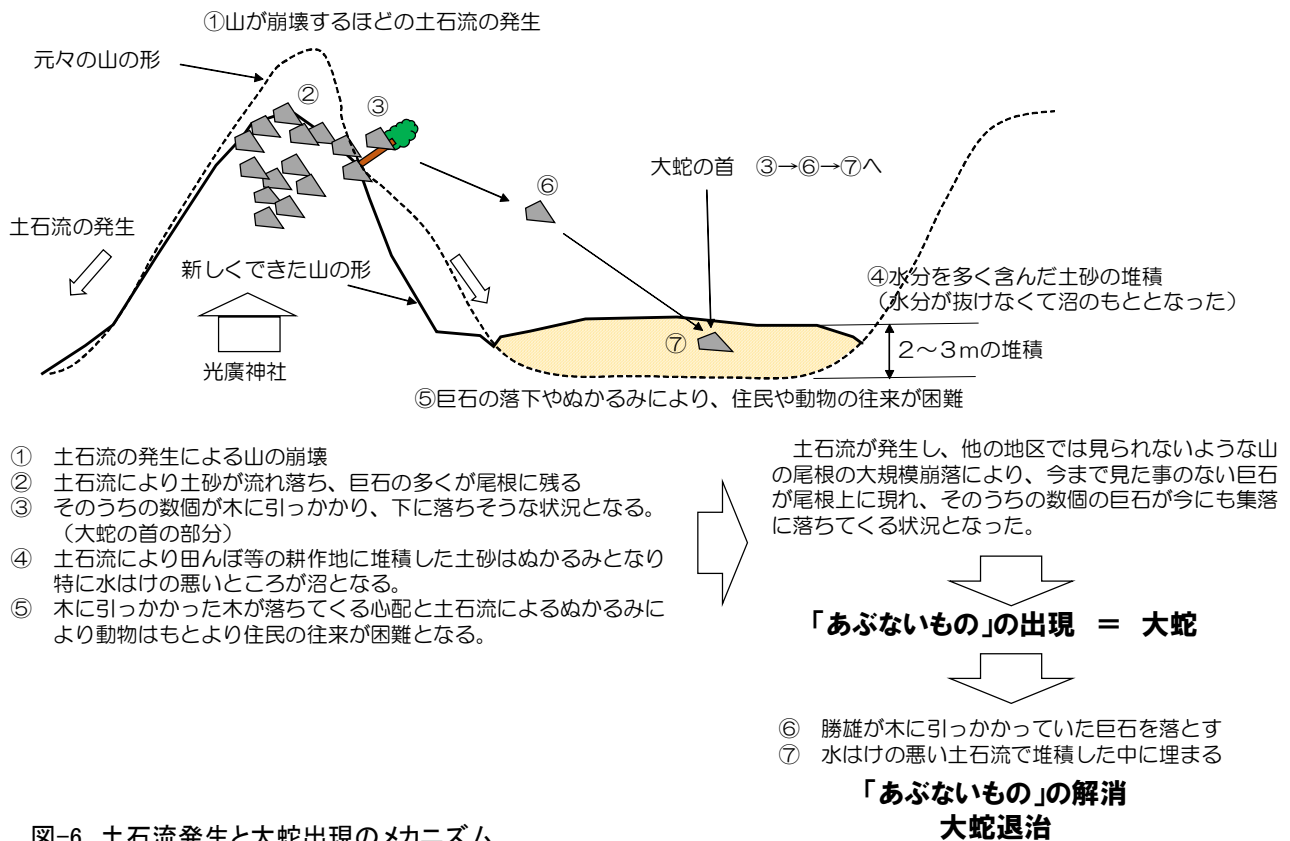


図-6 土石流発生と大蛇出現のメカニズム

て、その汁が飛び散っていたのではないかと思います。
これらは大蛇が「何もしない・ただ落ちそうにゆらゆらしている」では物語がおもしろくないので「大蛇なので何か攻撃してくるもの」として物語を盛り上げるために書かれたのではないかと考えられます。

一方、大蛇を出現させたために流れ落ちた大量の土砂はどうなったかという、集落の田畑に厚く(3m以上)堆積し、当時はバックホウ等の土砂を撤去する重機やダンプトラックもなかったため、土砂を取り除くことが出来ず、そのまま放置された結果、一部の元々低かった土地では水を含んだぬかるんだ土地が形成された(沼になった)と思われる。

そして数年が経ち、その土地の上に人々が帰ってきて生活をはじめ、山側の土地は今の様な形状が残り、現在の光廣神社東側の二つの谷となる尾根を形成したものと想定されます。

このように解釈すると、大蛇の正体は、光廣神社から阿武山に向かう山の尾根にある巨石群(写真120・21・22)であったと理解出来、土石流が発生した溪流は光廣神社の北東側にある溪流(写真19)であると結論付けられます。

古い話では多くの箇所です土石流が出た谷を「蛇が抜ける」

と表現し、地名を名付けたりにしているの、村民は谷から発生する土石流で被災する経験はあったのでしようが、山



写真-20・21・22 阿武山尾根に見られる巨石

の尾根から崩れ落ちるような土石流を経験した事がなく、ましてや尾根に連なった巨石群を初めて見たため不気味なもの、しかもおまけに今にも落ちそうな巨石が木に引っかかっていたので近寄らないよう「あぶないもの」として共有するため、あえて「大蛇」として表現したのではないのでしょうか。

そして、この地を谷からの土石流の発生で呼ばれる「蛇抜」という土地で呼ぶのではなく、香川勝雄が「あぶないもの」として現れた大蛇を成敗し問題を解決したと言う地として、讃える意味で「蛇王子」と呼んだのではないのでしょうか。それを後世まで語り継ぐため大蛇退治をあえて軍記物を編纂した陰徳太平記に特別編として物語を入れ込んだと。

その後、月日が経ち、実は讃えるための蛇王子が大蛇が落ちた地の「蛇落地」となり、さらに土石流の頻発するような悪い地「蛇落地悪谷」となり、印象が悪いと言うことで蛇落地から上楽寺、上楽地へと、悪谷から足谷へと変遷していったのではないかと推察されます。

さいごに

本文の作成にあたり、国土交通省広島西部山系砂防事務所より、設計業務の報告書の一部をお借りする事が出来ました。また、八木3丁目の畠堀秀春様に本件の執筆について相談したところ、八木小学校百周年記念誌や黄鳥の笛の

書籍を紹介して頂きました。感謝の意を表して謝辞といたします。

参考文献

- ・ 米原正義 校注「正徳二年板本 陰徳太平記一」
- ・ 辻 治光「黄鳥の笛」
- ・ 佐東地区まちづくり協議会「想い出の佐東町」
- ・ 八木地区連合町内会「八木の歴史をまなぶ」
- ・ 八木小学校創立百年記念誌編集委員会

「八木小学校創立百周年記念誌 しらうめ」

- ・ 古谷尊彦「がけ崩れ・地すべりと地名」

(基礎工 vol.118-1990)

- ・ 佐古憲作「広島豪雨土砂災害対策推進室での回想録」
- ・ 佐古憲作「H21. 7. 21に防府市を中心にした土砂災害について(地域が歩んできた道を検証してみてわかったこと)」

- ・ 佐東町史
- ・ パシフィックコンサルタンツ(株)

平成26年度 広島西部山系八木緑井地区砂防堰堤予備設計(その5)業務

インターネット

- ・ 広島県教育委員会「広島県遺跡地図及び一覧表」
[https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/b](https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/bunkazai-map-map.html)

[bunkazai-map-map.html](https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/bunkazai-map-map.html) (文化財情報)

- ・ いさぼうネット「歴史的大規模土砂災害地点を歩く」
コラム46 広島市安佐南区・八木地区の災害伝説と
大正15年(1926)災害
- ・ 国土地理院 2万5000分の1地図